
 国際学会報告

米国における中世哲学研究の現状

稲垣良典

1984年10月から1985年3月まで、プリンストンの高等研究所⁽¹⁾ The Institute for Advanced Study の研究員 member として、主にオッカムの認識理論の研究に従事する機会を与えられ、この間、米国のいくつかの大学、中世関係の研究所を訪ね、⁽²⁾ 現在米国で行われている中世哲学研究の一端にふれることができた。はじめに以下で行う報告の背景として米国における中世研究の歴史にふれておくべきであろうが、その詳細については次の書物を参照していただきたい。F. G. Gentry, C. Kleinhenz (ed.), *Medieval Studies in North America*, Medieval Institute Publications, Kalamazoo, Michigan, 1982. なお最近刊行された E. ジルソンの伝記は、この偉大な中世哲学史家が1926年をはじめ米国を訪れて以来、カナダおよび米国における中世研究の進展にどのように寄与したかを詳しく叙述しており、貴重な資料である。Laurence Shook, *Etienne Gilson*, Pontifical Institute of Mediaeval Studies, Toronto, 1984.

わたくしの個人的印象にもとづいていうと、現在の米国における中世哲学研究の顕著な特徴は14世紀への関心の集中である。これはハーバード大学のマードック教授を中心とする科学史研究の計画が14世紀に焦点を合せていること、⁽³⁾ 優れた研究成果を挙げているコーネル大学のクレツマン教授、⁽⁴⁾ ウィスコンシン大学のコートニイ教授の研究計画も14世紀を中心としていること、概して中世を近代ルネサンスとの連続性において研究する傾向が見られること、⁽⁶⁾ その他の事実にてらして裏づけられる。それはいいかえると、1960年代以降、米国における中世哲学研究はカトリック、プロテスタント、ユダヤ教などの宗教的色彩、トミズムないしスコラ哲学擁護あるいは批判という「護教的」性格をほとんどまじえないで、純粋に哲学的研究として推進される傾向が強いということである。

トマス哲学研究の現状についてのべると、1974年、トマス死去700年を記念していくつかの論文集、雑誌の特集号が⁽⁷⁾発行されたあと、トロントのオーエンズ、⁽⁸⁾ニューヨーク、⁽⁹⁾フォードダム大学のクラーク、ワシントン、アメリカ・カトリック大学のウィップル、⁽¹⁰⁾ノートル・ダム大学のマキナーニ教授⁽¹¹⁾などの著作、論文が注目される。最近、トロント中世研究所の支援の下にテキサスにトマス研究センターが設立され、トマス研究の振興をめざしている。⁽¹²⁾なおトマスにたいして「批判的」関心を向けていた「哲学国際アカデミー」⁽¹³⁾は昨年テキサスからヨーロッパのリヒテンシュタインに移転した。トマス著作の批判版刊行に従事しているレオ版編集委員会 *Commissio Leonina* はアメリカ・カトリック大学を本拠として、委員長 W. ウォーレス教授⁽¹⁴⁾（ドミニコ会）の下で活発に仕事を進めている。『形而上学註解』の刊行が遅れているので旧知のウォーレス教授に尋ねたところ、数年前に校正刷りの検討も一応終わったのだが、なおアリストテレス『形而上学』のラテン語訳について確めなければならない点があり、ルーヴェン大学における *Aristoteles Latinus* の仕事の進行を待っている、との返事であった。なお資金面での制約が厳しく、2年に1冊以上の刊行は期待できない、と聞いている。

オッカム研究については、何よりも（国家と教会の関係、政治哲学をめぐる著作を除く）かれの神学・哲学的著作の批判版刊行のめざましい進捗ぶりに言及しなければならない。最初、P. ベーナー神父を中心に進められたこの事業は、最近約20年間（ハンガリー出身で、かつてスコトゥス批判版の仕事に従事していた）G. ガル神父の指導の下に精力的に推進された。作業の迅速・正確さに大きく寄与したのがコンピュータの徹底的な利用であり、とくに批判版の仕事場であるフランシスカン・インスティテュートのコンピュータは、中世研究所をもつニューヨーク州立大学（ビンガムトン）の大型コンピュータと連結していて、資料の入力から印刷まで一貫作業ができる仕組になっている。先年ルーヴェン大学に滞在した折、トンベール教授の案内で中世研究におけるコンピュータ利用の状況をつぶさに見学し、その威力に驚嘆したが、今回もフランシスコ会の修道衣をまとったガル神父の「兄弟」コンピュータを讀める熱弁に強く印象づけられた次第である。

オッカム哲学の研究に関しては、*species in medio* の問題にたいする関心の高まりが目についた。⁽¹⁶⁾また A. ゴッドゥ教授のオッカム自然学の研究も最近のオッカム研究の⁽¹⁷⁾高い水準を示すものといえる。ここ十数年活発に発言してきた UCLA の M. アダム

ズ教授は⁽¹⁸⁾たまたまサパティカルでプリンストンに滞在されていたので何度か会って話を
する機会があったが、G. レフの⁽¹⁹⁾大著については甚だしく不満であり、オッカム哲学の
正しい理解のために千頁をこえる大著を書き上げた、とのことであった。アダムズ教授
の⁽²⁰⁾著作、およびオッカム生誕700年を記念してオックスフォード、および上記フランシ
スカン・インスティテュートで行われた学会の記録が刊行されたあかつきには、オッカ
ム哲学の現状をよりよく把握することができるようになると思われる。

次に学会についてのべると、ウェスタン・ミシガン大学（ミシガン、カラマズー）で
5月9—12日（1985年）開催された第20回国際中世研究学会には是非出席して、色々
と耳にしている評判をこの限でたしかめたいと思ったが、日程の都合で実現できなかつ
た。100頁をこすプログラムによると、参加者は千数百人、報告のテーマは中世神学・
哲学から文学、美術、音楽さらに風俗にまで及んでおり、文字通り僧院からカーニバル
まで、の観がある。

ワシントン D. C. のカトリック大学では毎年特定の主題について十数名の講師による
連続講義が行われているが、1984年秋の主題は「中世の哲学」であった。米国以外の
地域からの講師は G. アナワティ（在エジプト）、J. マッケヴォイ（アイルランド）、G.
ヴィーラント（西ドイツ）、それにわたくしの四人であったが、あとの九人は米国の代
表的な中世哲学研究者と見なされているので参考のため紹介しておきたい。E. マホー
ニ（デューク大学）、A. ハイマン（コロンビア）、M. アダムズ（U. C. L. A.）、S. ブ
ラウン（ボストン・カレッジ）、N. クレッツマン（コーネル）、J. ウィップル（カトリ
ック大学）、C. ノーモア（トロント）、J. ロス（ペンシルヴァニア）、E. スタンプ（ヴ
ァージニア州立大学）。

最後に、わが国における中世哲学研究と比較してとくに印象づけられた点について一
言ふれておきたい。それは、大学院における研究は先駆的・独創的でなければならない
、との要求（「脅迫観念」といってもよいが）である。これまで誰もやっていないこ
とがらについて学位論文を書き、学界に寄与しなければ研究者として認められない、と
いう慣行が色々な消極的側面をともなうことは確かである。またそれが指導教授に大き
な負担を強いることも否定できない。しかし、中世哲学研究が国際的な学界あるいは研
究者の共同体のなかで行われるようになった現在、わが国においても若い研究者が独創
的な研究をなしうるような研究指導組織、施設の整備が急務ではなかろうか。生涯かか

って研究を大成させる美風は尊重しなければならないが、大学院で国際的な水準の独創的研究が数多くみられるような体制を作ることが今後の課題であると思う。

- (1) 中世関係の研究者としては著名な科学史家 M. クラゲット教授がおられ、オッカム研究に関して貴重な教示を受けることができた。
- (2) The Catholic University of America, Commissio Leonina. The University of Notre Dame, The Medieval Institute. Villanova University, The Augustinian Historical Institute. St. Bonaventure University, The Franciscan Institute. Fordham University.
- (3) “From Social into Intellectual Factors: An Aspect of the Unitary Character of Late Medieval Learning.” *The Cultural Context of Medieval Learning*, ed. Murdoch and E. D. Sylla, p. 271—339, Reidel, 1975. のほか、科学史に関する論文多数。
- (4) *Infinity and Continuity in Ancient and Medieval Thought*, Cornell University Press, 1982 のほか多くの著作、論文がある。なお、クレッツマン教授は *The Cambridge History of Later Medieval Philosophy* の編者の一人である。
- (5) *Adam Wodeham. An Introduction to His Life and Writings*, E. J. Brill, 1978 のほか、著書、論文多数。
- (6) 前記 *Medieval Studies in North America* 参照。アメリカ哲学会にも中世・ルネサンス研究という部門がある。
- (7) *The Thomist, The New Scholasticism, The Monist, International Philosophical Quarterly* 等が特集号を刊行している。
- (8) *St. Thomas Aquinas on the Existence of God. The Collected Papers of Joseph Owens*, ed. J. R. Catan, State University of New York Press, 1980; *Aquinas on Being and Thing*, Niagara University Press, 1981; “Being and Nature in Aquinas,” *The Modern Schoolman*, LXI, 1984.
- (9) *The Philosophical Approach to God. A Neo-Thomist Perspective*, Wake Forest University Press, 1979.
- (10) *Metaphysical Themes in Thomas Aquinas*, The Catholic University of America Press, 1984.
- (11) *The Logic of Analogy* (1961), *Studies in Analogy* (1968) 共に Martinus Nijhoff のほか、*Thomism in an Age of Renewal, St. Thomas Aquinas* 共に Notre Dame University Press, *Ethica Thomistica. The Moral Philosophy of Thomas Aquinas*, The Catholic University of America Press, 1982.

- (12) A. A. Maurer, *About Beauty. A Thomistic Interpretation*, 1983; *Thomistic Papers I & II*, ed. V. B. Brezik, 1984 などが刊行されている。
- (13) *Aletheia. An International Journal of Philosophy*, Vol. I, 1977 J. Seifert, Essence and Existence. A new Foundation of Classical Metaphysics on the Basis of "Phenomenological Realism" and a Critical Investigation of "Existential Thomism," および J. Crosby, The Idea of Value and the Reform of the Traditional Metaphysics of *Bonum*, *Ibid.*, I, 2 などの論文が注目に値している。
- (14) ウォーレス教授は科学史家としても著名であり *Causality and Scientific Explanation*, 2 vols. The University of Michigan Press, 1972; *Prelude to Galileo. Essays on Medieval and Sixteenth-Century Sources of Galileo's Thought*, D. Reidel, 1981 などの著作がある。
- (15) これらはマンチェスター大学出版部から刊行されている。
- (16) 参照。K. H. Tachau, *Vision and Certitude in the Age of Ockham* (Doctoral Dissertation) University of Wisconsin, 1981; The Problem of the *species in medio* at Oxford in the Generation after Ockham, *Mediaeval Studies*, 1982, p. 394—443.
- (17) A. Goddu, *The Physics of William of Ockham*, E. J. Brill, 1984.
- (18) 参照。拙稿「オッカムにおける直観的認識の問題」、『中世哲学研究』第4号, 1985.
- (19) Gordon Leff, *William of Ockham. The Metamorphosis of Scholastic Discourse*, Manchester University Press, 1975.
- (20) ノートルダム大学出版部から刊行予定。

第5回国際アンセルムス学会

山崎裕子

《St. Anselm and St. Augustine》というテーマのもとに、1985年9月16日から21日までの6日間、第5回国際アンセルムス学会 (Fifth International St. Anselm Conference) がアメリカのペンシルヴェニア州にあるヴィラノーヴァ大学 (Villanova University) で開催された。同大学 The Augustinian Historical Institute の後援によるもので、会期後半の20日から22日は、例年同研究所の主催する International Con-